

魔 的 な る も の

カラマーゾフの兄弟

佐々木 徹

Über das Dämonische

—Die Brüder Karamasow—

Tohru SASAKI

I

キェルケゴールがモーツァルトの『ドン・ジョヴァンニ』に聴いた「官能の原音」は、あらゆる倫理的範疇の彼岸にあって、ドン・ファンという一つの理念、いわば抽象的存在だが、その抽象は同時に、幾重もの人間的衣装を脱ぎすてて、直接、生の根源にふれる歓びと一つになっている。いうまでもなくキェルゴールは、感覚的直接性の段階にとどまることを肯んじず、さらに倫理的・宗教的段階へと実存的に高まることを説いたが、問題は、高次のキリスト教的実存の立場で、初期の感覚的直接性がどのように止揚されつつ生かされるかということであろう。倫理的段階でも宗教的段階でも、「官能の原音」は不断に一つの絶対的価値として、それらを破るものとして、鳴り響いているにちがいない。

ドストエスキイは、『カラマーゾフの兄弟』の長男・ドミートリイを通して、この美の問題を追究する。カラマーゾフの血のなかには、情欲という嵐がひそんでいる。それが美にふれて騒ぎ出すと、すべての矛盾が一つになってしまう。美は謎だ。美しい心とすぐれた理性をもっている、この美のためには悪と汚辱の淵に沈んでしまうが、そんな中にあってしかも、清らかなあこがれの火を絶やすことがない。人間の心は実に広い。理性の眼には汚辱と見えるものが、感覚にとってはめくるめく美なのだ。美は恐ろしいばかりでなく神秘である。いわば神と悪魔の戦い、そしてその戦いの場が人間の心なのだ——しかしここに、相反する二つの価値の矛盾をただ客観的に見ただけでは、ドミートリイの悲痛な叫びは落ちてしまうだろう。ドミートリイが言いたかったのは、人間存在の根源的な「謎」である。「神さまは人間に謎ばかりかけている。」ソドムの美に蠱惑されて、どこまでも沈淪する、これが一つの現実である。そのかぎり、マドンナの美の浮かぶ余裕はない。がしかし、ソドムの美に没りきっている、その只中

で、マドンナの美が一条の光のように射してくる。本来一つになるはずのないものが、その徹底において、一つのもんとして体験される。といっても、この体験は直ちに「戦い」の終焉を意味しはしない。むしろ、戦いのさなかの安らぎ、緊張の極みの静謐と言えるであろう。ドミートリイの立場からすれば、それは「謎」である。彼はその「謎」を生きるしかない。マドンナの美を垣間見、それに憧れることはあっても、彼はソドムの美を振り捨てはしないであろう。もしそうすれば、そのときマドンナの美は死に、安っぽい宗教画のようになってしまいうちがいない。「俺はこうして進んで行きながら、自分が悪臭と汚辱に踏みこんでいるのか、それとも光明と喜悦の中へ入っているのか、自分でも見分けがつかないのだ。こいつがどうも厄介なのだ。実際この世の中では、一切が謎だ。」「深き汚れ」のなかに沈みながらも、「神さまの子」である喜びを胸に感じるドミートリイは、生の謎を直接生きることににおいて、どこか生命のもつ清らかさにふれている。

ドミートリイは、父・フォードルの淫蕩の血をひいている。フォードルもまた「剃刀で胸を刺すような」美にふれた経験をもつが、彼はそこからすべてを冗談と化す道を選ぶ。彼にとっては真面目なものは一つもない。自分のなかにも自分のそとにも、真剣なもの・神聖なものを認めようとししない。道化が彼の生き方である。しかし、道化というものがつねにそうであるように、その仮面の下には、何か必死なもの・悲劇的なものが隠されている。それを彼自身は見ようとししないが、彼の分身であるドミートリイやイヴァンを恐れ、アリョーシャを頼りにするところに、それはうかがわれる。カラマーゾフ的な淫蕩の力は、快楽のためなら祖国も父母も売り渡してしまうといわれる。フォードルからドミートリイへ、その血が流れている。ためにフォードルは、みづから分ち与えた血による復讐をたえず恐れなければならないし、ドミートリイもまた、自己のなかの父親殺害の可能性と闘いつづけなければならない。

『カラマーゾフの兄弟』には、基本的な人間関係のすべてが出てくると言ってもよい。フォードルとその子供たちという親子関係、ドミートリイ・イヴァン・アリョーシャの三兄弟、カチェリーナ、グルーシェンカ、リーザ等との女性関係、そしてゾシマ長老とアリョーシャの師弟関係と少年たちの友情関係。これらはみな極めて身近な人間関係である。ドストエフスキは、こういった親子・兄弟・男女・友達という人間関係を通して、しかもそれらを抽象化せずに、真の人間関係を探求している。愛憎を孕んだそれらの関係が、血とか肉とかをもったままで真の「兄弟」となることは可能か、と問うているのである。その探索の道を照らしているのは、いわゆる血肉とは無縁な師弟の出会いである。生きる上での師に出会うことが、真に自己自身となることであり、同時に他者との真の関係が開かれることである。これはアリョーシャが「渴ける心の初恋にも似た情熱を捧げて」ゾシマ長老に傾倒するところに端的にあらわれている。『カラマーゾフの兄弟』という大部な、しかも未完に終わったロマンの主人公はアリョーシャである、とドストエフスキがその冒頭でのべていることを見逃してはならない。もちろ

ん、アリョーシャが実際に活躍するのは、書かれなかった第二部だが、作者は「本質的な統一を保ちながら、おのずと二つの物語に分たれた」その前篇においても、十分、アリョーシャにその役割を果たさせている。ドミートリイやイヴァンにくらべてアリョーシャの存在は稀薄だとする所論は、ドミートリイの「感情」とイヴァンの「思想」の展開に眼を奪われ、それら熱い存在のあいだを吹きぬけるアリョーシャの「無私」を見すごしている。それは風のように姿形をもたないが、それぞれの「魔」にとりつかれて突走る二人の兄が誰よりもまずその存在を信じ、必要としている。そのように、ドストエフスキは書いている。

アリョーシャこそは、先きに言った、あらゆる人間関係の要めに位置している。親子・兄弟・男女・師弟・友達といった関係がアリョーシャを中心にして繰りひろげられる。アリョーシャの「無私」は「愛の実践」という形をとる。抽象的な愛という観念から程遠いところに、彼はいる。二十歳にして僧院へ入りたいと願うアリョーシャの「純粋」を抽象的なものとしないうために、ドストエフスキがいかに力をつくして書いていることか。「アリョーシャは性格のしっかりとした、薔薇色の頬をして、健康に燃える明るいまなざしをした、二十歳の青年であった」「彼は決して狂信家でもなければ、神秘主義者でもなかった」「アリョーシャは最も正しい意味で現実派であった」等々。アリョーシャのこの「健全」は、しかし、僧院生活を「究極の理想」とする。ドストエフスキは、その連関を論理的に説明しようとはしない。ただ、ゾシマ長老との出会いを指摘するだけである。人との出会いが、みずからの歩む道を決定する。これこそが、真の意味での出会い、人生の師との出会いである。親子・兄弟・男女・友達といった愛と憎しみを孕む関係が、真の正しい関係となるためには、それぞれが人間として「無私」として、もう一度出会うことが必要である。カラマーゾフの兄弟が、真の「兄弟」として出会うとき、それは単なる血縁を超えた広く深い交わりを約束するであろう。そして、それを可能とするものが、アリョーシャの「無私」に他ならない。

「本質的な統一をもちながら、おのずと二つの物語に分たれた」とドストエフスキは書いているが、ではなぜ、前篇の父親殺害事件という物語が必要とされたのか。「父親殺害」というのは、文字通りには正しくなく、フォードルの下手人は私生児スメルジャコフであって、ドミートリイでもなければイヴァンでもないが、ドミートリイもイヴァンも共に父親を殺害しかねない動機をみずからのうちにもっていて、ドミートリイはそのために無実の罪を背負い、イヴァンは精神錯乱への道をたどる。この二つの十字架の途上にはまたアリョーシャが立っている。アリョーシャの存在が実際の父親殺害から守っている。書かれなかった後篇も含めて、『カラマーゾフの兄弟』は、アリョーシャが次第にゾシマ長老となる物語であって、その生成の過程で、アリョーシャは、ドミートリイやイヴァンと苦悩を共にする。抽象的な愛ではなく、実行的な愛。そのために、親殺しの可能性を含む大いなる否定の契機が必要とされた。それが感情的にあらわれればドミートリイとなり、思想的にあらわれるとイヴァンとなったので

ある。

彼らの苦患を共にするため、ゾシマ長老は、アリョーシャに僧院から出るように勧めている。これは、いわゆる神にのみ仕える生活が真の信仰ではないことを示す。父や兄たちと出会い、将来は妻や子供たちともかかわることによって、真の信仰は証される。アリョーシャは、現実人間に生きる世界へ出てゆかなければならない。がそれは「社会」という抽象的な空間ではなく、父や兄、さまざまな女たちや子供たちの生活の場である。先きに、アリョーシャの存在が二人の兄を父親殺害から守ったと書いたが、それは、アリョーシャが単なる傍観者ではなかったことを意味する。傍観者の立場で誰かを救うことはできない。アリョーシャは二人の兄との血のつながりを感じている。アリョーシャもまたカラマーゾフである。同じところに立ちながら、しかしアリョーシャは、イヴァンとドミートリイを彼ら自身よりも深く理解している。その理解は、血縁よりも深い生命自身の肯定の力、ひとことで言えば「愛」である。

ドミートリイの「告白」は、アリョーシャという「地上の天使」を得て初めて可能となる。「天上の天使にはもう話したが、地上の天使にも話さなくちゃならん。お前は地上の天使なんだ。よく聞いて判断して、そしてゆるしてくれ」と語るドミートリイには、ゆるしを乞う相手が必要である。フォードルの死に関して、「僕はあなたが下手人だとは、一分間も信じたことがありません」というアリョーシャの言葉に、ドミートリイは「ありがとう。今こそお前は俺を生き返らせてくれた」と叫ぶ。

イヴァンにたいするアリョーシャはもっと深刻である。それは、イヴァンの反逆と否定が思想として徹底されているからである。父・フォードルも、だから激情的なドミートリイよりもイヴァンの沈黙の方を恐れている。イヴァンは、すべてが許されているという思想の延長線上に父親殺害のありうることを自覚している。下手人はスメルジャコフだが、教唆し同意したのは自分だと認めている。そんなイヴァンにアリョーシャは「あなたではない」と力をこめて言う。「あなたは自分で自分を責めて、下手人は俺以外に誰もないと自白したのです。けれど、殺したものはあなたじゃありません。あなたは思いちがいをしています。下手人は、あなたじゃありません。僕の言葉を信じて下さい。あなたじゃありません。神さまは、このことをあなたに言うために、僕をおつかわしになったのです。」

事実としてイヴァンが父親を殺していないことは、誰よりもイヴァン自身がよく知っている。が、イヴァンのなかには動揺がある。実際にはスメルジャコフが手を下したとしても、イヴァンの奥深くそれを肯定するものがある。アリョーシャはそんなイヴァンの心の底を見抜いて「下手人はあなたじゃない」と言い、イヴァンの思いちがいを指摘する。そのとき、アリョーシャはイヴァン自身よりもイヴァンを理解している。その理解は「神」につながっている。神の使いとして、アリョーシャはイヴァンのなかの「悪魔」を「あなたではない」と否定する。「僕の言葉を信じて下さい」というのは、アリョーシャを使わした神を信じ、イヴァンの

なかの本当のイヴァンを信じよということである。もともと父親殺害がイヴァンの思想の当然の帰結であるのなら、イヴァンに苛責は生まれないはずだ。そこで動揺をきたしたのは、イヴァンの生がイヴァンの思想だけでは汲みつくせなかったからである。

アリョーシャは、生の意義以前、論理以前に生そのものを愛することを語っている。不信と懐疑にみちたイヴァンにも、春の若葉や美しい青空を見て、生の喜びにつらぬかれるときはある。アリョーシャはイヴァンをそこから理解している。アリョーシャを生かし、イヴァンを生かし、この世のありとあらゆるものを生かしている生命の清冽な流れから、アリョーシャの言葉は発している。生の意義を論理的に追究すると、生を否定するものにぶつからざるをえない。イヴァンが例に挙げた「無垢な子供の涙」はその典型だ。何の汚れも知らぬ幼児がいったいなぜ虐殺されねばならないか。この問いは、さまざまな形で、いつの時代にも共通なものであろう。この世にみちみちている悪と不合理。イヴァンは「事実から出発する」と言っている。そして、そのような悲惨な現実があるかぎり、この世界を拒否する。この地上に、人間同士の愛を強いる法則はない。人間は、ときとして獣以上に残忍だ。イヴァンは、このような論理から、この世がたとえ神の創ったものであったとしても、神の国への入場券を断わる。たったいま目の前での調和を要求する。未来の平和に意味はない。流された子供の涙は永久につぐなわれないままだ。「事実にとどまる」とイヴァンは言うが、そのイヴァンの論理が、不正への怒り、つまり「愛」の上に築かれていることは直ちに明らかであろう。劇詩「大審問官物語」に登場する大審問官も「人類への愛という病い」をついに癒せなかった者として描かれている。イヴァンの書かれざる劇詩は、大審問官とキリストとの「愛」をめぐる対決だと言っている。キリストの愛は、ひたすら人間の自由を認める。荒野の誘惑を斥け、信仰すらも人間の自由意志に任せた。それはすべてをゆるす無限の愛である。大審問官からすれば、しかしそれは愛の行為ではない。人間に無限の自由を与えることは、人間を愛することではない。なぜなら、人間は自由の重荷に耐えきれないからで、人間はむしろ自由を肩代わりしてくれる者を求めている。大審問官は、キリストが否定した「奇蹟と神秘と教権」にもとづき、人間の自由に向方向性を与え、万人のパンと幸福を保証し、みずからは秘密を知る不幸な者となる。

イヴァンが劇詩という形で語る無神論の立場は、信仰の立場と拮抗する深さをもっている。大審問官の否定は、メフィストフェレスのようなシニカルな否定ではなく、みずからの存在の痛みに拠っている。キリストは「石をパンに化せ」という荒野の誘惑にたいし「人はパンのみにて生きるにあらず」と、人間の自由意志を守ったが、その結果人間は、それぞれの自由を主張するあまり収拾のつかない混乱に陥った。そこでは、もはや人間の合理的知性は無力である。むしろ各自の合理的知性の主張が戦いと自滅を招いたのである。通常は無神論は、人間の知性を超える存在を認めず、すべては合理的に解明しようとする立場だが、大審問官は、そういった合理的知性にたいする絶望を通過している。民衆は合理的に自由を行使することはできな

い。民衆には旗印が必要であり、それが「奇跡と神秘と教権」なのだ。キリストを否定した大審問官は、キリストの名のもとに民衆を導き、平安を与える。この、キリストの仮面を被ったアンチ・キリストは、歴史的にさまざまな形をとるであろうが、その本質は、神を否定しみずから神になろうとする「人神」の立場である。

イヴァンの無神論が深いのは、それが「愛」にもとづいているからである。そして「愛」は、どんなに悲劇的・否定的結論にいたろうとも、それが「愛」といわれるかぎり、生きて動いている。生きて動くものは、たえず論理の手から洩れる。イヴァンの無神論が「大審問官物語」として、いかに強固に構築されようとも、そこには何らかの洩れがある。ドストエフスキイはそれを、終始沈黙を守ったキリストの大審問官にたいする接吻としてあらわしている。ひとことも言葉を発しないキリストは、大審問官の論難をすべて認めている。すべてを認めた上でなされるくちづけは、大審問官の否定ではない。くちづけは否定的になされる行為ではない。しかしまた、大審問官の主張にたいする単なる肯定でもない。キリストのくちづけは「愛」の行為である。みずからを否定するものを隈なく理解し包みこむ、いわば絶対肯定である。イヴァンに初めて会ったゾシマ長老は「もし肯定の方へ解決することができなければ、否定の方へも決して解決されるときはない」とのべている。

劇詩を語り終ったイヴァンが、この思想のために僕を否定するかとアリョーシャに問うと、アリョーシャは無言のままイヴァンに接吻する。イヴァンは「剽窃だ」と叫ぶが、同時に喜びの情を隠すことができない。アリョーシャのくちづけは、劇詩のなかの洩れを汲みとっている。劇詩という言葉に、愛の行為という形を与えている。それはイヴァンの生の確認でもある。

同じ悲惨な人間の現実を前にしても、イヴァンのような論理性をもたないドミートリイの方がむしろ開かれていて、たとえば無実の罪でとらえられ審問されたあと、酷しい冬の焼野原に立ちつくす母子の夢を見、「聞かせてくれ、なぜその焼け出された母親たちが、ああして立っているんだ、なぜ人間は貧乏なんだ、なぜ餓鬼は不仕合せなんだ、なぜ真裸な野っ原があるんだ、なぜあの女たちは抱き合わないんだ、なぜ接吻しないんだ、なぜ喜びの歌をうたわないんだ、なぜ暗い不幸のために黒くなったんだ、なぜ餓鬼に乳を飲ませないんだ」と叫ぶ。それはどうしても発せざるをえない問いである。しかし、そこからイヴァンのように、否定的な結論にはいたらず、目が覚めて頭の下に置かれている枕に気づき、誰が枕をさせてくれたのかと「まるで大変な慈善でも施されたように」歓びと感謝の気持にみたされるのである。そして、自分のなかに「新しい人間」の誕生を感じ、「餓鬼のために」刑につくことを覚悟する。世の不合理は、イヴァンのように自己の外ではなく自己のうちに、十字架として受けとめられている。不合理のゆえに世界を拒否するイヴァンは、誰からも切り離されて見知らぬ国へ行こうとするが、それはつまり自分一人の孤独のなかへ降りてゆくことであり、イヴァン自身が予期

しているように、行く手には多分、自殺が待ち受けている。

II

先きに、『カラマーゾフの兄弟』という未完に終わったロマンは、アリョーシャがゾシマ長老になる物語だとのべた。指適される通り、第一部でアリョーシャの活躍する場面は少ない。事件は、むしろドミートリイとイヴァンをめぐって展開し、アリョーシャは聴き手もしくは使者の役割を果たすにすぎない。が、これも先きにふれたように、アリョーシャは単なる聴き手や使者ではない。話を聴き、話を伝えることによって、事柄の「真実」を生み出している。イヴァンやドミートリイにたいして「あなたではない」と否定するとき、アリョーシャは二人の兄における「新しい人間」の蘇生に参与している。

アリョーシャ自身については、ゾシマ長老の死後、何ら奇蹟的なことは起らず、時を置かずして屍臭の漂い出したことから心に動揺が生じること、少年たちとのかかわりのなかでイリュエーシャの最期を看取ることぐらいが主な出来事であって、ドストエフスキイものべている通り、アリョーシャの重要な活動は第二部に属していると思わざるをえないが（ある評論のように、作者は初めから第二部を書く意図はなかったとするような新奇な意見を、私はもたない）、それでも、第一部におけるアリョーシャの行動は、書かれなかった第二部の主人公としての面影を十分に彷彿させている。

アリョーシャは「無私」である、と先きに書いた。それは対他者の関係では絶対に相手を裁かないということである。相手の自由をどこまでも認める立場である。これはしかし無責任・無関心な立場ではない。もし相手が憤りや悲しみをもっていれば、それを自分自身のものとして、その責めをわが身に引き受ける積極的な行為の立場である。行為というものが、現実的な対象とのかかわりを抜きにしてはありえないものだとなれば、これほど具体的な行為もないであろう。いわゆる社会的実践は、ともすれば個を抽象した理論に化し、われのみ正しとする自己主張に墮す。アリョーシャの言動は、その正反対である。アリョーシャの「無私」は、私をなくすことにおいて、相手と一つに生きる立場である。アリョーシャが主人公であるといわれるときの独自性はそこにある。イヴァンやドミートリイ、グルーシェンカやリーザ、そしてフョードルにたいしてすら、アリョーシャは相手を生かしつつ、みずからの役割を果たすのである。

このようなアリョーシャのあり方を決定づけているものは、ゾシマ長老との出会いである。アリョーシャの傾倒にたいして、ゾシマ長老の方も愛着を感じている。それは、アリョーシャが夭折したゾシマ長老の兄・マルケールに似ていたからである。マルケールは十七の春、病いに倒れ、忽然として真実を悟る。生きるということは素晴らしいことだ。人間が本当に幸福になるためには、一日だけでも十分である。互いに憎みあったり侮ったりせずに、互いが互い

にたいして罪あることを自覚しさえすれば、天国はすでに地上のものである。自分という殻に閉じこもらず、真に心をひらけば、美しい空や木立や小鳥たちがそのことを讃えているのがわかる。不幸は、みずからが作り出したものに他ならない。こういう言葉が人生の緒についたばかりで倒れたマルケールの口から聞かれるのである。この話を初めとする第六編「ロシアの僧侶」は、イヴァンの「大審問官物語」の反論として書かれている。といっても、それは同じ論理の次元に立ったものではない。イヴァンと同じ論理の次元に立てば、帰結はやはり否定的なものとならざるをえないであろう。その意味では、第六編は全く反論になっていないという見方も可能である。この世の悪の存在について、その責めを自分に引き受けることはナンセンスだとも言える。第六編を通じて鳴り響いているのは、万人にたいする罪の自覚、それこそが愛だという教えである。こういった愛の体得は至難だが、これにまさる力はないともいわれている。「地獄とは、もはや愛しあたわざる苦悶である。」

ドストエフスキイが、いくつかのエピソードと説教によって言わんとしているのは、いかなる否定的な現実の底をもつらぬいて流れている「生命」である。これにふれるためには、その人自身の生き方の根本的な転換を要する。たとえば、ゾシマ長老の若き兄のように、一朝にして悟るというようなことがなければならぬ。もちろん、これは簡単なことではない。しかし、ドストエフスキイはその実在への確信から『カラマーゾフの兄弟』を書いている。自身、賭博者であり、さまざまな「悪」とも無縁でなかったドストエフスキイが、その混沌とした暗い生活の中から一条の光を信じ、アリョーシャやゾシマ長老として、描き出している。これは、くりかえすが、論証ではない。たとえば、次のような形でしか表現できないものである。

あるとき、余はただひとり兄の部屋へ入って行った。ちょうど兄のほかには、誰ひとりいなかった。それは晴れ晴れとした夕方のことで、日はまさに没せんとして、部屋全体を斜めに横切って光を投げていた。兄は余をみつけると、手を上げて差し招くので、余はそばへ近寄った。すると、兄は両手を余の肩にかけ、さも感激したようになつかしげなまなざしで、じっと余をみつめるのだった。何も言わないで、一分ばかりそうしてみつめていたが、「さ、もうあっちへ行ってお遊び、そして僕の代わりに生きておくれ」と言った。

自分の代わりに生きてくれと言うのは、科学的に言えばおかしいことである。自分という意識は、その肉体の死とともに滅びるであろう。マルケールが弟に見出したのは、したがって、いわゆる自己ではない。それは、「私」を去った自己である。マルケールが生き、その弟が生き、その他あらゆるものがいのちを得ている、その根源は「無私」である。二十歳にならずしてこの世を去るのは、人生の不条理であり悲劇であるかもしれない。「何のために」という疑問がそこに生じて当然であろう。しかし、マルケールは日数や年月を問題にしない。しあわせになるためには、今このときだけで十分だ。そう自覚することが、生きることである。マルケ

ールはそこで永遠を感じている。「僕の代わりに生きておくれ」という言葉は、その永遠を背景としていわれている。今この時を真に生きるためには、今この時を超越したものがなければならない。そうでなければ、それは刹那主義である。刹那主義もまた今しか信じないが、その今はつねに虚無の上にある。自己のいのちの底に徹することが、同時に他者との深い連結の自覚となると、初めて「僕の代わりに生きておくれ」という言葉もいのちを得る。

ゾシマ長老がアリョーシャに亡き兄を見出したことは、マルケールの生きた「真実」をそこに認めたということである。アリョーシャの顔は、ゾシマ長老にとって「追憶と予言」であるといわれている。アリョーシャは亡き兄を思い出させるが、その兄は「神の指標」として、ゾシマ長老の行手を示したのである。アリョーシャもまたゾシマ長老に深い崇敬の念を抱く。アリョーシャ自身の目標がゾシマ長老によって示されている。だからこそ僧院に入ることを決意したのである。この師弟の出会いは、鏡と鏡のように互いに映しあい照らしあっている。だから、ゾシマ長老の死に接して、アリョーシャがある期待をもったのも当然だと言える。が、奇蹟は起らず、遺体は腐敗しはじめる。アリョーシャの心に動揺が生まれる。もちろん、彼は、奇蹟が信仰を生み出すのではないと知ってはいたが、敬愛する師の逝去に当ってはある種の奇蹟が起るかもしれないという期待はあった。それが裏切られたのである。遺体の腐臭は自然なことである。そこで奇蹟が起らなければ、師と信仰を否定するか。ここで、アリョーシャはイヴェンに通ずる岐路に立つ。ラキーチンの言葉のままに、アリョーシャは蹣跚としてグルーシェンカのもとに赴く。ラキーチンの意図は、グルーシェンカにアリョーシャを誘惑させることにあったが、しかしアリョーシャはグルーシェンカに「女」ではなく「人間」を見る。グルーシェンカも「いやらしい目的なしに」自分を愛しゆるしてくれる人を待っていたと話す。ドミートリイのように、女の美に惑溺することは起らないのである。そうしてふたたび僧院にもどったアリョーシャは、ガリラヤのカナの婚筵の夢を見る。そこにはゾシマ長老の姿があり、アリョーシャを招いている。その席に列っているのは「一本の葱」を与えた者ばかりである。ささやかな愛の行為をした者たちの奇跡の婚筵。イエスの奇蹟の場で、故・ゾシマ長老と現身のアリョーシャが再会する。彼らはイエスの「愛」によって結ばれている。この体験により、アリョーシャは確固不動の立場を得る。「この事件は彼の魂に一転期を画し、その理性を震撼させるとともに、ある目的へ向けて生涯ゆるぎなく固定させた」とドストエフスキイは書く。このあと、僧院を出たアリョーシャは、感動にみたされて、星空の静寂のもと、地上に身を投じ、涙とともに大地に接吻する。

おお、彼は無限の中より輝くこれらの星を見てさえ、歓喜のあまりに泣きなくなった。そうして「自分の興奮を恥じようとしなかった。」ちょうどこれら無数の神の世界から投げられた糸が、いっせいに彼の魂へ集まった思いであり、その魂は「他界」との接触にふるえ

ているのであった。彼は一切にたいしてすべての人をゆるし、それと同時に、自分の方からもゆるしを乞いたくなくなった。おお、それは決して自分のためではなく、一切にたいし、すべての人にゆるしを乞うのである。「自分の代わりには、また他の人がゆるしを乞ってくれるであろう」という声が、ふたたび彼の心に響いた。

彼が大地に身を投げたときは、かよわい青年にすぎなかったが、立ち上がったときは、生涯ゆらぐことのない、堅固な力をもった一個の戦士であった。

「かよわい青年」が「堅固な戦士」となるとは、どういうことか。アリョーシャの霊的体験は、ゾシマ長老の死を契機としている。ガリラヤのカナの婚筵における師との再会は、その復活の体験である。復活とは、しかしいったん死んだ人間がもう一度生き返ってくることではない。アリョーシャが体験した師の復活は、師と一つになった「自己」の体験である。その意味で、もはや師は存しない。師を必要としない。アリョーシャは師の存在をそっくり受け継いでいる。それが師と並ぶということである。師を求め師を要した青年アリョーシャは、かくして一人立ちした戦士となる。戦士となったアリョーシャは、愛の行為者として、後進をみちびいてゆかねばならない。少年たちとの出会いは、そこに始まる。

少年たちの物語は、イリュージョンを中心展開されている。父親をドミートリイに辱められた幼い怒り、ピンを食べさせた犬のジューチカにたいする後悔、そして病い。コーリャを初めとする友達との仲違いと仲直り。イリュージョンは、自分が病気になったのはジューチカを殺したからだと思っている。父親は別の犬をもらってきて慰めようとしたが、イリュージョンの心は晴れない。友達がどこからか兎を持ってきたときには、「ほんの心持ちにっこりして」野原へ逃がしてくれるように頼む。少年たちの世界は、イヴァンやドミートリイたち大人の世界を映している。イリュージョンの悔いは、ジューチカという他を否定したところから生じている。その陰には、ピン入りのパンを食べさせるよう唆かしたスメルジャコフがいる。イヴァンは、スメルジャコフによるフォードル殺害の結果、精神錯乱に陥るが、イリュージョンは病いに倒れる。いなくなったジューチカには、他のどんな犬も代わることができない。兎を逃がすのは、その自由を認めるということである。そのもの自身のもとに任す、それは愛の行為である。アリョーシャはコーリャと会い、一部始終を聞く。コーリャはペレズヴォンという野良犬を飼い、芸を仕込んでいる。アリョーシャは、ペレズヴォンをジューチカに仕立てることを示唆する。もちろん、コーリャは偽りを拒否する。「この犬がジューチカだったら」という友達スモーロフの言葉をきっぱり退けている。アリョーシャが勧めるのは、ひとつの演技である。イリュージョンの家を訪れたコーリャは、ひとこともジューチカだとは言わない。「ジューチカは、あんなご馳走を食べたんだもの、いなくなるに決まっている」と突き放し、その代わりにペレズヴォンという犬をつれてきたと告げる。「そんな犬など、いらぬ、いらぬ」と叫ぶイリ

ユーシャの前へ、コーリャはペレズォヴンを走り出させる。芸をする。イリュースシャの眼が輝き、「ジューチカだ」という喜びの声が上がる。「そう、これはジューチカだ」というコーリャの声がそれに和す。「奇蹟」は、かくして成就される。これは「愛による復活」だと言っているだろう。

しかしドストエフスキイは、『カラマーゾフの兄弟』の最後を、ドミートリイの有罪判決とイリュースシャの埋葬とによって結んでいる。いずれも否定的な現実である。ドストエフスキイは、とくに子供の死について過度なほどの関心を寄せていて、まず第二編で四人の子供を亡くした夫婦の話を書き、第五編でイヴェンによる幼児虐殺の資料を挙げ、そして第十三編ではイリュースシャの死を刻明に描いている。この裏面には、ドストエフスキイの子供にたいする並々ならぬ愛着がある。アリョーシャは「どんなときでも、子供のそばを平気で通り過ぎることができなかった」と書かれ、ゾシマ長老の説教のなかでも子供を愛することが強調され、「子供のかたわらを通りすぎるとき、心のふるえを感じずにはいられない人」アンフィーム師のことがのべられている。ドストエフスキイにとって、子供は「天使」である。その子供がいわれなく死んだとき、のこされた者はそれをどう受けとめればいいのか。たとえば、第二編に登場する夫婦は、三つになる男の子を亡くしたあと、涙の乾くときがない。いくら天国にいと慰めてみても、もうひとつの心は、今ここにいないではないかと訴える。母親を呼ぶかわいい声、ことごとと歩く小さな足音を、たった一度でいいから聞きたい。これが切実な願いである。ゾシマ長老は答えて言う。「ああ、慰められぬがよい、慰められることはいらぬ、慰められずに泣くがよい。ただな、泣くたびごとに怠りなく、お前の子供は神さまのお使わしめのひとりとなって、天国からお前を見おろしながら、お前の涙を見て喜んで、それをば神さまに指さしておるということを、忘れぬように思い出すのじゃぞ。お前の母親としての大きな嘆きはまだまだつづくが、しまいにはそれが静かな喜びとなって、その苦い涙も静かな感動の涙、罪障を払い心を浄める涙となるであろう。」

ゾシマ長老は、子を亡くした親の嘆きを否定しはしない。慰められぬがよいと言う。そんな形で、悲しみの深さを測っている。どんな慰めの言葉も、その深みまで達しない。当事者以外の者にできるのは、その悲しみをそっくりそのまま認めることだけである。ゾシマ長老は、それがいつか、「静かな喜び」となると言うが、今の母親にはそれも直ちに納得されはしないであろう。しかし、母親は悲しみの只中でゾシマ長老を訪ねてきている。悲しみのなかで、悲しみの向うを求めている。それを直接癒すのは、文字通り、子供の蘇りであろうが、それは到底望むべくもない。とすれば、のこされたのは、悲しみに徹して悲しみの向うへ突きぬけること以外にない。慰められぬがよいと言ったゾシマ長老は、また子供のいる神の国をさし示している。その天国もすぐには信じられないかもしれない。たとえ信じられても、問題は、現に今その子供がいなかったということであった。そのかぎり、悲しみの終るときはない。子を亡くした親

の心は永久に慰められないと言える。しかし、その絶対に慰められるはずのない悲しみが、悲しみのうちに次第に昇華してゆく、とゾシマ長老は言うのである。そして多分、それが生きるということなのだ。ドストエフスキは第六編でも、ヨブ記に関して同じような思想をのべている。いくら新しい子を得ても、前の子が永久になくなった埋めあわせにはならない、前と同じような喜びはもう二度ともどってこないと嘆くが、もう一度同じ幸福を感じることが可能なのだ。「昔の悲しみは人生の偉大な神秘によって、次第次第に静かな感激にみちた喜びに変わる。」

絶対にかけがえのないこの世の現実のかけがえのなさを本当に知るとは、どういうことか。突然訪れた喪失を前にして、ただ嘆き悲しむほかに手はないというのが、さしあたっての実感であろう。ドストエフスキがこの実感を叙する筆致は熱い。しかし、ひたすら嘆き悲しむのが、本当にこの世の現実のかけがえのなさを会得した者の態度であろうか。自己と世界の唯一絶対性を真に悟った者は、そのかけがえのなさを生きなければならない。こう言うところ抽象的だが、それは「一枚の木の葉、一条の光」をも愛するということである。しかもそれは、単に目の前の小さな存在を大切にすることにとどまらない。一枚の木の葉、一条の光の實在に、自分が生きているという内面からふれることである。そして、それに真にふれるためには、自己が「無私」でなければならない。「私」に死んでいなければならない。この世のあらゆるものに、自己の生命の根底からふれるためには、「私」の死を必要とする。「一粒の麦」の死がなければならない。一粒の麦とは、我に死して他を生きることである。そうして初めて、「愛」が可能となる。

ドストエフスキは、作品の初めにヨハネ伝第十二章二十四節「一粒の麦もし死なずば」の聖句を掲げている。そこからひるがえって考えれば、『カラマーゾフの兄弟』に登場する人物のほとんどすべてが、それと知らず「一粒の麦」をめざしている。ドミートリイやイリューシャはもちろんのこと、グルーシェンカ、カチェリーナ、さらにイヴァンもまた「一粒の麦」であると言えるだろう。そして、それらの大きな旋回の中心にいるのは、いうまでもなくアリョーシャである。

作品の掉尾、イリューシャを葬った場所で、アリョーシャは少年たちに別れの言葉をのべるが、それは美しく力強い肯定の言葉にみちている。イリューシャの墓石の前で、まず第一にイリューシャのことを、そして第二にお互いひとりひとりを忘れないという誓いをしよう。イリューシャはやさしく勇敢な少年だった。これから将来、いろんなことが起り、名誉を得たときにも、また不幸に陥ったときにも、かつてこの町で、互いに心を通わせ、やさしい思いやりに結びあわされて素晴らしい時をすごしたこと、イリューシャを愛することによって、私たちが実際以上にいい人間になったことを、決して忘れないようにしよう。この美しい思い出は、私たちがさまざまな障害から守ってくれるにちがいない。たとえ悪の道に踏み迷うことがあっても、

イリューシャとともにすごした少年時代の追憶は、きっと私たちを救ってくれるだろう。私は私の心の中に君たちひとりひとりを、忘れないようしっかりととどめたい。君たちも私を忘れないでほしい。けれど、私たちを結びあわせてくれたのは、あのイリューシャだったということを決して忘れないようにしよう。君たち、これから歩む人生を恐れてはいけない。正しい心をもつ者にとって、人生はいつも美しい。

アリョーシャの言葉は、かつて僧院を出るときゾシマ長老が言った「人生のなかでさまざまな不幸に出会うであろうが、その悲しみのなかでも幸福になることができるであろう」に呼応している。

(’80.8.12.)